



人間科学部長

# 嶋根克己 教授

しまね かつみ

略歴：埼玉大学教養学部卒、同大学院修了。中央大学大学院単位取得退学。筑波大学助手を経て専修大学に着任。学生部長などを歴任し、2018年9月人間科学部長に就任。専門は社会学（社会意識論）。著書は『非日常を生み出す文化装置』（藤村正之との共編著）、『生きづらさの時代』（香山リカ、上野千鶴子との共著）など。趣味はスポーツ、オーディオ。

## 問題解決力を育むゼミを目指して： 大学における教育目標をめぐる28年間

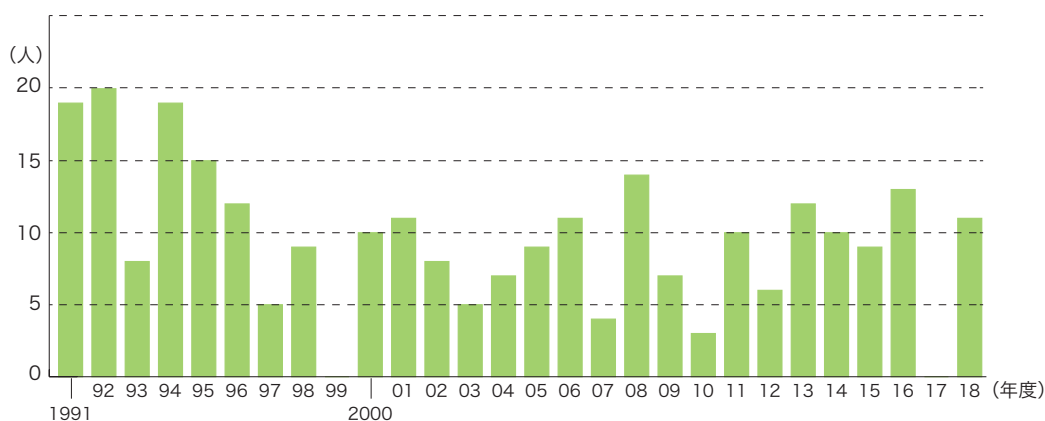
### はじめに

今でも鮮烈に覚えている記憶があります。大学に入学したばかりの第1回目の体育の授業において、担当教員が「君たちは何を目的に大学に入ってきたのか」と学生一人一人に質問したのです。第一志望の大学に入学できなかった私は、返答に窮するばかりでした。この問いは今も私の心に刺さっています。何を学ぶために大学に進学したのかという基本的な姿勢を問われたのです。立場を変えてみれば、大学教員は大学生に何を目的にどのように教えるべきなのか。この小論では約30年にわたる私の教育実践とそこから得られた大学教育についての私の基本的な考え方を振り返ってみたいと思います。

### 試行錯誤が続いたゼミナールの運営

私は1976年に埼玉大学の教養学部に入學し、同大学院の修士課程を修了しました。それから中央大学の大学院博士課程に進学し、筑波大学で助手などをつとめ、1991年に専修大学文学部に着任しました。その後文学部から人間科学部に所属変更をしながら現在に至るまで28年間、授業やゼミナール（以下「ゼミ」）などで本学学生の指導に当たってきました。

これまでの履修者名簿をもとに4年生の履修者数をグラフに表したものが次頁の〈図〉です。多い年には20名、少ない年には3名というときもありましたが、平均して10名程度の学生を毎年担当し、合計して270名ほどの学生を指導してきましたこととなります（1999年度と2017年度は長期研究休暇を頂



〈図〉卒業論文指導人数

きましたので、ゼミの担当はしませんでした。)

日本の大学教員のほとんどがそうであるように、私も大学での教授方法を体系的に学んだわけではありません。したがって専修大学での授業運営は、自分が学んだ大学での授業やゼミでの経験をもとに、それらを踏襲する形で始めました。着任直後のしばらくの間、ゼミは一学年あたり20名という大所帯で、一人一人の顔と名前を一致させるのに精いっぱい、さらに多様な研究テーマを選択する学生を相手に、年末が近づくと一度に20本の論文を並行して書いているような気分になりました。ゼミを運営するにも確たる指針があるわけではなく、研究をするための基礎体力作りとして社会学の古典的な著作を順番に割り振って熟読していく、いわゆる「輪読」をゼミ運営の中心に据えておりました。

この当時がゼミ運営にもっとも苦労した時代です。ゼミには多様な問題関心を持った学生が入ってきます。しかし、輪読形式ではそんなに多くのテキストを読むわけにはいきません。したがってテキストに関心を持ってない学生は、学問そのものへの関心が薄れてしまいます。それが如実に表れたのは、ゼミ生に夏合宿の提案をしたときです。セミナーハウスを用いて合宿を行おうとしたところ、学生は「何のために合宿に行くのですか」という反応でした。普段のゼミの延長ならば、貴重な時間とお金を使ってまで行きたくない。時間とお金をかけるならばそれなりの見返りが必要だという感じでした。

### ディベートを中心にしたゼミ合宿

この経験から私は大事なことを学びました。つまり学生は貴重な時間と金と労力を払っているのだから、それに対応するだけの見返りを教員は約束しな

ければならない。ただし単位の授与をちらつかせて彼らを束縛することはしてはなりません。その見返りが何なのかをはっきりさせることが私にとっての大きな課題となりました。夏合宿でのみ集中的に実施可能で、遊びや就職活動のための時間を犠牲にしてでも行きたいと思わせる特別な活動、それを試行錯誤する夏が続きました。

思いついたのは、夏合宿に競技ディベートを行うというアイデアでした。3泊4日のほとんどを資料の収集と論点の整理、そして立論の準備にあてて、3日目の午後に競技的なルールに従ってディベートを行いました。私自身はディベートについての体系的な教育や訓練を受けたことはなく、指導は手探りの状態での出発でした。学生たちにとっては一つの目的のために夜を徹して議論し、準備を重ね、シビアな緊張感の中で自分の考えを述べなければなりません。その成果は、合宿の振り返りでの満足度、後期の授業からの学生たちの凝集力、そして卒論のための準備や執筆過程に如実に表れてきました。学生たちの主体的な取り組みを通じて確かに成長したという実感を得られること、これが不可欠だと感じました。

### 3段階の論文執筆

私のゼミにはもう一つの特徴があります。それは卒業論文執筆までに3段階を踏むという点です。文学部、人間科学部は3年次4年次のゼミの履修と卒業論文の執筆が卒業の必須要件となっており、社会学科では最低20,000字の卒業論文の執筆が課されています。多くの学生にとって20,000字の研究論文執筆は初めての経験であり、しかもそれに失敗すると留年という大きなプレッシャーがかかってきます。この圧力によって卒論提出が近づく11月12月には



精神的なストレスをため込む学生が多くおりました。論文の内容よりもメンタルな相談に時間をかけなくてはならないこともしばしばありました。

そこで私は卒論執筆を、ホップ、ステップ、ジャンプの3段階でクリアする方式を明示しました。社会科学では3年次4年次に所属するゼミを希望する段階で入ゼミ論文を書かなければなりません。自分でテーマを探し出し、ささやかなもので良いからまずは論文を書いてみる。これがホップです。3年次には提出期限と字数が厳密に定められている学生部主催の懸賞論文への提出を目指します。これがステップです。他者に読んでもらうための研究論文を締め切りに間に合わせて書くことは、大きな試練となりますが、次の卒業論文執筆にむけての自信につながります。懸賞論文で扱ったテーマをさらに発展させる者、全く別なテーマに取り組む者など様々ですが、その1年数カ月後には大学生での研究成果をまとめる卒業論文を完成させます。これが大学生生活最後の大きなジャンプとなります。

### 大学教育の目的を自覚する

このようにゼミ運営を巡って試行錯誤してきた私ですが、自分の教育目的を明確に見直す機会を得ることになりました。進学系の雑誌から授業運営の方法と目的について寄稿を依頼されました。それまで直感的に行ってきた授業運営について自覚的にとらえなおす機会となりました。その結果文科系の学生が、大学教育を通じて得られる能力を次の6つの要素に要約しました。それは①問題を発見する力、②情報を幅広く収集する力、③自分なりの解決策を考えぬく力、④文章にまとめる

力、⑤自分の考えを他人に伝える力、⑥コミュニケーション能力です。つまりゼミとは少人数教育を通じて、自分で問題を発見し、自分で解決していく力を身につけるための場だということを私自身がはつきりと自覚しました。

現代の日本では18歳人口の約半数が4年制大学に進学するという大学教育の「ユニバーサル化」(M.トロウ)の時代に到達しました。大学は一部のエリートのためでなく、多くの人が行かなければならない普遍的な学校教育の一部に組み込まれました。大学に進学するほとんどの人にとって大学は人生最後の学校教育の場となります。

したがってそこで学ばなくてはならないのは就職のための一時的なスキルではなく、人生全般にわたって応用可能な叡智でなければなりません。人間としていつまでも利用可能な叡智とは何か。それは労働や生活の場面において、自分が直面している問題は何なのかを発見し、それを解決する能力を身につけることにほかなりません。これはいくら機械やAIが発達しようとも、人間にしかできない生きる姿勢といっても良いでしょう。私たちの人生はマニュアルでは解決できない数々の困難に満ちています。正解のない問題解決の糸口をつかみ、それらに立ち向かっていくこと、これがいつの時代にも必要とされる人間の基本的能力なのではないでしょうか。

可塑性に富んだ若い時代に人生全般に必要な叡智を身につけるための環境を提供すること、それが大学教員の目的だと信じて、今後も試行錯誤を重ねていきたいと考えています。

#### 【参考文献】

- ・『教育人会議』(2013年秋号、フロムページ)
- ・『Between』(2014年No.258、進研アド)



2018年10月に行われたディベートにて。現在ではディベートは授業期間中に一般公開で行われている